

日本人英語学習者は未知の英語の食感形容詞を理解できるか？ Can Japanese Learners of English as a Foreign Language Guess Which Unknown Ideophones to Choose?

森下 美和¹, 原田 康也²,
Miwa MORISHITA, Yasunari HARADA

¹ 神戸学院大学, ² 早稲田大学
Kobe Gakuin University, Waseda University
miwa@gc.kobegakuin.ac.jp, harada@waseda.jp

Abstract

Learning a foreign language consists surprisingly a lot of learning new words. It is often argued that you have to have acquired something like 8,000 words to be fluent in English, but most Japanese learners of English have learned at most 2,000 or 3,000 words when they enter college, most of which are forgotten rather quickly. Part of this difficulty is due in part that in English, spelling and pronunciation do not correspond one to one and at least at the initial stages of learning, correspondence between sound and meaning is “arbitrary.” Or is it?

In this study, we are interested to see if certain “universal” connection between sound and meaning studied under such terms as “sound symbolisms” might help learners of language acquire new vocabulary. In the pilot study we conducted, 25 fourth-year students at a private university in Hyogo Prefecture, who had spent a semester outside Japan, were asked about 10 adjectives such as *chewy*, *sticky*, *gooey* and so on if they (1) know and understand the meaning of the words or (2) recognize the words but are not sure of their meanings or (3) vaguely recognize the words but do not know their meanings or (4) do not recognize the words at all. Then they were asked to choose one out of two adjectives that they think goes better with a noun, such as { *sticky* / *mushy* } and *soup*. 18 out of 25 students surveyed, or 72% which is much greater than chance, responded that *brittle* goes better than *gooey* with French fries, which is interesting as all had responded that they had never seen nor knew the meaning of those two adjectives, with the average familiarity score of 1.5.

A slightly different survey was conducted with 67 students studying at the same university, who were asked to tell their familiarity with 22 ideophonic verbs and choose one out of three items that goes best in the given context. The results suggest that the students are not simply making random choices, even when they do not know the words that they are asked to choose from.

Keywords — Onomatopoeia, Ideophone, Japanese Learners of English as a Foreign Language

1. はじめに

外国語を学習し運用できるようになるためには、正確な発音と抑揚を覚え、文法に従って外国語を理解・産出する技能を身に付け、適切な表現を選択する語用

論的・社会言語学的な理解を持つことももちろん重要であるが、多くの語彙を覚えることが外国語学習の基本となることもまた避けがたい事実である。英語で母語話者や熟達した英語学習者と支障なくコミュニケーションできるためには、ざっくりと 8,000 語の語彙の獲得が必要であるとさまざまな研究者・団体等が提言している。

英語の単語では発音と綴りの関係が 1 対 1 とは程遠く、多くの例外も含めて極めて複雑な関係となっていることが語彙学習上の障害となる。ソシユール言語学以来の科学的な言語学のアプローチで当然の前提としてきた言語記号の恣意性、つまりある言語における単語に伴う音と意味との間には何ら必然的・有縁の関係が存在しないとすれば、英語の語彙の学習は無意味つづりの記銘よりもさらに高度な記憶課題となることが明らかである。実際には、ある程度の基本的な語彙を身に付けると、反対語・類義語・同義語・派生語など意味的な関係のある語彙の記憶には合理化の余地があり、発音と綴りの関係についても、さまざまな例外はあるものの一定の関係性を見出すことも不可能ではないため、すべての単語について無意味つづりの記銘と同様の負荷があるわけではないが、学習の初期の段階において知らない単語の意味を予測することは原理的に不可能であり、したがってそもそも知らない単語の意味は分からなくて当然ということになる。

単語の派生と品詞の転用によって、英語の基本語彙を出発点として関連する語彙に対する理解を深めることが可能である。例えば *act* というアルファベット 3 文字でつづられる単音節の単語について、本来的な用法での品詞と意味は「動作する」という動詞であっても「立法」や「行為」を意味する名詞としての使用も見られる。*act* → *active* → *activate* という動詞から形容詞を経てさらに動詞に至るという派生の過程も見られる。*active* からは *inactive* という反対語を得ることができる。あるいは *act* → *enact* → *enactment* と

いう名詞から動詞を経て名詞に至るという派生過程も見られる。*act* という動詞から *action* という名詞を得てこれを動詞に転用するのも英語の特徴の一つの表れである。しかし、基本的な名詞・動詞からこのように多様な派生語が直ちに得られ、あるいは様々な転用が見られるということは、基本的な名詞・動詞にさまざまな意味・用法がからまり、その多様な意味をもれなく理解し、適切に使用できるようになるためには、単音節の発音とアルファベット 3 文字の綴りを覚えることに比して多大な学習時間と英語の使用経験が必要となることも含意している。英語では基本動詞と（副詞的用法の）前置詞の組み合わせによって幅広い意味が表されることはよく知られているが、外国人英語学習者にとっては、より「難しい」とされる長い綴りの動詞の方が汎用的な単音節の動詞より意味が確定的で使いやすいか、なじみやすいというのもよく知られたところである。*reiterate* などの「難しげな」単語の方が意味の多義性が少なく、覚えるのも簡単であるという側面もある。

一方、認知科学と関連分野において近年関心を集めている研究課題の一つに音象徴がある。これは、言語の発音とその意味になんらかの関係性があるという観点から単語の学習について新たな知見を与える可能性がある。日本語に比較し、英語に様相や様態を表す形容詞や副詞としてのオノマトペが乏しいという印象がしばしば語られるが、そのような形容詞や副詞の比較に注目するあまり、英語の比較的基本的な動詞や名詞にオノマトペなど感覚の惹起に由来・関連するものがあることが忘れ去られていることがある。*bang/ cling/ ping* など、*ideophonic* な表現がその基本的な意味から多様な用法を持つにいたった点も英語語彙学習の観点から改めて注目に値する。

日本で英語を学んできた大学生は 30 分で 400～500 語ほどの作文をまとめる *fluency* を獲得し、*writing* について *CEFR* で A2 から B1 レベル相当の習熟度となっても、文脈に応じて適切な名詞・動詞・形容詞・副詞を選択し、使用することができない。一般に、使用できる形容詞は乏しく、多様な形容詞を理解する語彙力も備えていない。また、副詞についてはほとんど使用語彙がなく、*very much* 以外の副詞的表現は自発的発話や作文に見られない。したがって、食感に関わる英語の形容詞に対する親密度は低く、使用経験はほとんどないと思われるが、その綴りから想像できる限りにおいて、文脈の中で適切な形容詞を選ぶこ

とができるかもしれない。
ここでは、簡単なパイロット調査の結果を紹介する。

2. 食感オノマトペ調査（調査 1）

さまざまな食品の食感を表す形容詞について、大学 4 年生 25 名を対象に次の調査を行った。調査は 2 段階に分かれ、前半の 10 問では、食品の食感を表す形容詞について、どの程度知っているかを 4 段階（4：知っている意味が分かる、3：見たことがあるが意味は自信がない、2：見たことがあるが意味は全く分からない、1：見たこともなくて全然知らない）で回答してもらった。表 1 に、各形容詞の代表的な意味（調査では提示していない）および親密度の平均スコアを示す。

表 1 食感を表す形容詞の親密度（4 段階）

形容詞	意味	親密度
brittle	サクサクの	1.5
chewy	噛みごたえのある	3.2
chunky	具だくさんの	3.4
crispy	カリッとした	3.8
crunchy	パリパリした	3.6
goosey	ねっとりした	1.5
gummy	ゴム状の	2.8
juicy	みずみずしい	4.0
mushy	トロトロの	2.0
sticky	ネバネバした	3.3

これらの結果によれば、なじみのある語となじみのない語との間には比較的是っきりとした違いが見られる。後半の 10 問では、食品を表す英語（名詞）を提示し、その食感を表すのにふさわしいと思う形容詞を 2 つの中から 1 つ選択させた。各食品の食感を表す形容詞（正解・不正解）とその解答率を、表 2 に示す。

表 2 食品の食感を表す形容詞とその解答率 (%)

食品	正解	解答率	不正解	解答率
biscuit	crunchy	96	chewy	4
cake	fluffy	88	chewy	12
candy	gummy	72	brittle	28
chocolate	crunchy	88	gummy	12
cracker	crispy	96	gummy	4
french	brittle	72	goosey	28

fries				
ice cream	gooey	72	chewy	28
meat	chewy	48	mushy	52
orange	juicy	96	gooey	4
soup	mushy	88	sticky	12

全体として、各食品の食感を表す形容詞について、7割以上が正答していることが分かる。クランチチョコ、クランチビスケット、グミキャンディなど、商品名にも見られるような場合は、特に正答率が高い。一方で、表 1 で比較的なじみ度が低いと思われる *gooey* や *brittle* などの形容詞についても（セットになったもう一方の形容詞のなじみ度にもよると思われるが）、正しく選択（または非選択）されている。これらのことから、食感を表すオノマトペは、その意味を正確に知らなくても推測しやすい傾向にあることが示唆された。

正答率が 50%を切った *chewy* については *meat* との関連が思い浮かばなかった可能性がある。本調査で扱った食感を表す形容詞はすべてポジティブな意味で使用することを前提にしていたが、*chewy* はある程度の硬さ（噛み切りにくさ）を想像させ、それがネガティブな意味に捉えられたとも考えられる。語は、その意味がポジティブかネガティブかという観点で理解したり使用したりするべきであるが、食感を表す形容詞についてもあてはまると言える。

3. 感覚表現動詞調査（調査 2）

食感を表す形容詞以外の ideophone（感覚表現）について、大学 2、4 年生 67 名を対象に調査を行った。調査は 2 段階に分かれ、前半の 21 問では、感覚表現動詞について、どの程度知っているかを 4 段階（4：知っていて意味が分かる、3：見たことがあるが意味は自信がない、2：見たことがあるが意味は全く分からない、1：見たこともなくて全然知らない）で回答してもらった。表 3 に、各動詞の代表的な意味（調査では提示していない）および親密度の平均スコアを示す。

表 3 感覚表現動詞の親密度（4 段階）

動詞	意味	親密度
babble	わめく、片言で話す	3.0
beep	ピーッと音を発する	2.7
bloom	花が咲く	3.3
boom	とどろく、人気が出る	3.3

buzz	ざわつく、ブンブンいう	2.8
cling	くっつく	2.3
clink	チャリンと音を立てる	2.3
crackle	パチパチと音を立てる	1.7
crash	衝突する、墜落する	3.8
dash	突進する	3.0
flash	ピカッと光る	3.8
gulp	ゴクリと飲み込む	1.7
hum	ブンブンと音をたてる	2.5
hush	しっ！（間投詞）、黙る	2.3
jolt	ガタガタ揺れる	1.4
pop	ポンと音を立てる、銃を発射させる	3.3
ring	ベルが鳴る	3.6
rumble	ゴロゴロと鳴る	2.0
smash	強打する	3.3
yelp	キャンキャン鳴く	1.6
zoom	ブーンという音を立てる	3.3

後半の 10 問では、問題文を完成させるのにもっともふさわしいと思う動詞を 3 つの選択肢から選ばせた。各問題文の選択肢および解答率を、表 4 に示す。

表 4 問題文の選択肢および解答率（%）

問題文	選択肢 (*は正答)	解 答 率
A baby was [] in the next seat.	*babbling crackling dashing	62.7 34.3 3.0
A deep voice [] through the auditorium.	*boomed rumbled clang	43.3 35.8 20.9
A gun [] out in the robber's hand.	zoomed *popped bloomed	47.8 32.8 19.4
The airplane [] onto the runway.	*crashed smashed flashed	64.2 19.4 16.4
The computer [] every five seconds.	*beeps clings booms	53.7 37.3 9.0

The door bell [].	*rang	97.0
	boomed	1.5
	dashed	1.5
The earthquake [] the house.	*jolted	68.7
	boomed	17.9
	popped	13.4
The girl [] down the wine.	yelped	40.3
	*gulped	38.8
	popped	20.9
The glasses were [].	crackling	49.3
	*clinking	32.8
	clinging	17.9
The station [] with excitement.	hushed	44.8
	*buzzed	40.3
	hummed	14.9

調査1は2択、調査2は3択であるため、直接比較することはできないが、チャンスレベルの正答率（30～40%）が目立つ。そのうち、*gulped* と *clinking* などは親密度も低い、*popped* と *buzzed* などはなんとなく知っているが、実際の使い方を知らないということが考えられる。一方で、*jolted* はなじみのない語の割に正答率が高いが、その他の選択肢 *boomed* と *popped* があてはまらないという消去法で正答を導き出したかもしれない。

5. まとめと今後の研究課題

本稿で紹介したパイロット調査の結果は当然のことながらまだ予備的な段階のデータであり、今後本格的な実験で確認する必要がある。特に、二肢選択・多肢選択の設問において、選択肢間の親密度の差が大きいと、選択が親密度の違いに影響される可能性が大きい点を考慮すべきである。また、親密度の低い選択肢を並べた際に、その綴りや綴りから想定される発音がミニマルペアではなく、複数の要素について大きく異なっている場合に、何を根拠に選択が行われたかはかならずしも明らかでない。日本語であれば、「さらさら・ざらざら」、「ぱくぱく・ばくばく」、「しとしと・じとじと」などのミニマルペアに近い対立を比較的容易に組み合わせることができるが、英語の場合はこうした操作は語彙的な制約から容易ではない。

しかし、上記のような様々な不十分さにも関わらず、本稿で紹介したパイロット調査の結果から、日本人の英語学習について無意味つづりの記銘とは異なるアブ

ローチが可能であることを示唆していることも認めざるを得ない。幅広くオノマトペ表現が使われる日本語に対して、英語のオノマトペは限られていると感じるかもしれないが、動作動詞などオノマトペ的な側面が基盤となっている場合も見られる。今後は食感に関わる形容詞から形容詞一般、さらには名詞や動詞などに対象を広げ、選択肢の選び方なども含めて細部にまで検討を加えた学習課題による調査を進めていきたい。

本調査の実施に当たって、著者たちは以下の研究経費等の支援を受けている。

- 科研費基盤研究(C)：課題番号 17K02987『高度翻訳知識に基づく高品質言語サービスの研究』（研究代表者：佐良木昌）
- 科研費基盤研究(C)：課題番号 16K02946『英語コミュニケーションにおける統語的プライミングを利用した統語処理の自動化促進』（研究代表者：森下美和）
- 科研費基盤研究(B)：課題番号 15H03226『日本人英語学習者のインタラクション（相互行為）を通じた自律的相互学習プロセス解明』（研究代表者：原田康也）

参考文献

[1] Lockwood, Gwilym, Peter Hagoort, and Mark Dingemanse. (2016). “How Iconicity Helps People Learn New Words: Neural Correlates and Individual Differences in Sound-Symbolic Bootstrapping.” *Collabra* 2 (2): 1–15. doi:10.1525/collabra.42.